

やけどに対する応急手当

1 やけど（熱傷）に対する応急手当

（1）やけどの応急手当の方法

- やけどは、すぐに水で冷やすことが大切です。靴下など衣類を着ている場合は着衣ごと冷やします。
- 氷や氷水での冷却は、かえってやけどが悪化することがあります。
- やけどを冷やすと、痛みが軽くなるだけでなく悪化を防ぎ、治りを早くします。



ポイント

- 水道水などのきれいな流水で十分に冷やします。
- 広い範囲にやけどをした場合は、やけどの部分だけではなく体全体が冷えてしまう可能性があるため、過度な冷却は避けます。

（2）やけどの程度と留意点

①一番浅いやけどの場合

- ・一番浅いやけどは、日焼けと同じで皮膚が赤くなりひりひり痛みますが水ぶくれ（水泡）はできません。
- ・よく冷やしておくだけで、ほとんどは病院に行かなくても自然に治ります。

②中ぐらいの深さのやけどの場合

- ・水ぶくれができるのは、中ぐらいの深さのやけどです。水ぶくれは傷口を保護する役割があるので破らないようにします。
- ・やけどを水で冷やした後に、小さいやけどを除いては、清潔なガーゼで覆って水ぶくれが破れないように気を付けて、早く病院に行きます。
- ・やけどを覆うものはガーゼのほか、皮膚にくっつかないプラスチックシートなどがよいです。

③最も深いやけどの場合

- ・最も深いやけどは、水ぶくれにならずに皮膚が真っ白になったり、黒く焦げたりします。ここまでのやけどでは痛みをあまり感じなくなります。
- ・このようなやけどは治りにくく、手術が必要になることがあるので痛みがなくても必ず病院に行きます。

ポイント

- 小さな子どもやお年寄りも、小さなやけどでも命に関わる可能性があるため注意します。
- 火事などで煙を吸ったときは、やけどだけでなくのどや肺が傷ついている可能性があるため救急車で病院に行く必要があります。